

和歌山城を見て考える 沼田公園長期整備構想



行政調査の帰りに時間があつたので、和歌山城を見てきました。徳川御三家だった城ですから、規模などは比べ物になりませんが、歴史に疎い私でも圧倒される雰囲気は充分ありました。

ふと、我が沼田公園に思いを馳せた時、長期の計画やランドデザインの維持、継承はいかにしていくべきか考えさせられました。

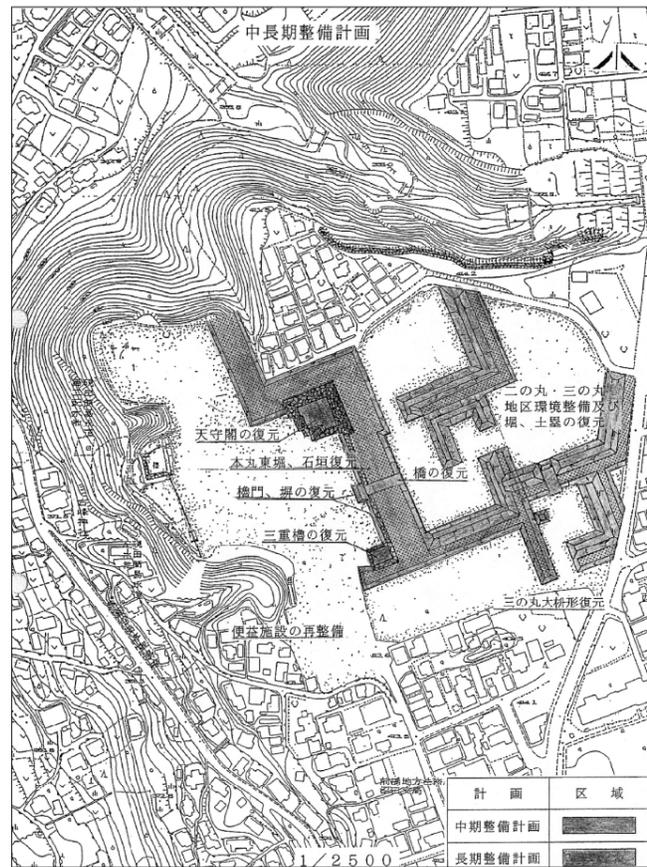
【沼田公園長期整備構想の復習】

平成元年の「ふるさと創生事業」を契機として、平成2年から構想づくりが開始され、平成5年に一度公表されました。

その後、庁内での「推進委員会」で、体系化や財源、沼田公園内の施設移転問題等を整理し、「推進基本方針」が定められ、平成8年に公表となりました。

その概要は、まず沼田市全体を「野外博物館」（フィールド・ミュージアム）として位置付け、城跡や古墳群を活かした関連プロジェクト（発知運動広場・沼須運動広場・奈良古墳公園・旧沼田貯蓄銀行移転）、また、特定プロジェクトとして（小沢・幕岩・川田各城址の整備と滝坂川河川緑地整備）などの全体像が、挙げられています。

そして次に、その核となる沼田公園は、沼田城エリアとして最終的には城の復元を目指して本丸（野外博物館ゾーン） 二の丸（広場ゾーン） 三の丸（エントランスゾーン）を定め、第1期から第3期での最短15年計画としたものです。



沼田公園は、動物の飼育、野球場、テニスコートの設置など「都市公園」としての整備が進められてきていました。

上の「中長期計画図」にも示されているように、史実に基づいて整備をしようとする、旧生方家、旧土岐邸洋館、英霊殿などを含めたほとんどの既存施設の「移転」等の対応が求められます。

昨今、整備構想の遅れと、財政的な厳しい情勢も踏まえて、公園内の野球場やテニスコートを沼須へ移すのではなく、敷地内で工夫して整備していく考え方も示されてきています。

概要書しか目を通していませんが、市民の多くの方々が、時間と費用と労力を傾けて調査し、報告された構想書には、郷土に対する深い情愛と熱意が感じられました。

今、改めて市民の創意と総意の結集が、求められているのかもしれませんが。

お詫びと訂正
前号に掲載の「高松城」は、正式には「備中高松城」で香川県ではなく、岡山市に今尚「城址公園」として、存続しています。不勉強と注意力の散漫さを深く反省しつつ、訂正させていただきます。

高柳 かつみと歩む会 ニュース

2013年冬・春期 NO41号

発行責任者 高柳 勝巳 〒378-0055沼田市柳町2570-11 割田アパート2号 22-6860
HP <http://www.orahoo.com/ayumu-kai/> Eメール xx.takayanagi-po@au.wakwak.com



松本市の「波田地区」の水車
沼田市でも自然エネルギー活用の具体化が見え始めてきているので、近隣自治体の先進事例を見て研究しました。

金属製の水車は、大変丈夫そうでしたが、近くにいると結構音が大きく心配しましたが、他には漏れず近所からの苦情はないと聞きました。

愛知県半田市の障がい者方々が運営する中華レストラン「うんぷう」のラーメンと施設で栽培された野菜サラダセットです。ドリンクとデザートが付いて900円でした。（マル得です）半田市は、市長も社協も障がい者を含めた「共生型社会」創りに積極的に取り組んでいると強く感じました。



新年明けましておめでとうございます。昨年、ロンドンオリンピックでの女性陣の奮闘での「感激」と年末の総選挙での再政権交代という「激動」という一年でした。何はともわれ、本年も自分に出来ることを精一杯取り組んでいこうと気持ちを新たにしていますので、どうぞよろしくお願ひ致します。

第41号目次

行政調査報告のページ	P 2 ~ 7
松本市・小水力発電・みなかみ町ピコ発電	
愛知県半田市・小地域福祉活動拠点整備事業	
和歌山市・「ふれあいの居場所開設事業」	
沼田公園長期整備構想に思う	P 8

民生福祉常任委員会行政調査報告

長野県松本市 小水力発電事業について 2012年10月31日

【視点と目的】私を含めて、多くの議員からも要望され、市長も『新年度には、何とかしたい!』とした小水力発電の実施について当該する常任委員会としては、総論賛成としながらも実際の詳細や課題について調査しておく意義は大きいとして隣県である松本市へ調査に行ってきました。

まず、旧東筑摩郡波田町の小水力発電事業の担当者だった、松本市波田支所・住民福祉課・百瀬課長補佐から事前に事業の経過と実際の取り組み内容を伺いました。

歴史的経過や地形の特徴

旧波田町は梓川右岸の河岸段丘上にあり、町北側の松本市梓川地区との境に梓川が流れています。

1930年ころから生じた上水道敷設問題での村内の対立は、政友・民政両党勢力の対立になって流血事件まで引き起こしたため、「波（波乱）が多い」と読める村の名称を「波田」と改めたとされています。

町の中には、黒川堰（せぎ）、波田堰、和田堰があり、いずれも梓川から取水して、水田に灌漑するため人工的に掘削されたものです。

地域の名産物に「水原スイカ」があり、今回の水力発電とカタカナのスイカを掛けてスイカの町「波田」で街おこしの契機としたと聞きました。

波田マイクロ発電の概要

- ・設置場所：波田総合病院西側ビオトープ）
- ・水車型式：下掛け水車（製造：(株)中川水力）
- ・発電機型式：永久磁石発電機
（製造：株式会社ウィンベル）
- ・計画有効落差：0.5メートル
- ・計画流量：0.7トン毎秒
- ・計画出力：0.7キロワット

長野県地域発元気づくり支援金助成事業

水車設計	100,000円
水車（下掛け式）	2,400,000円
水車支持用架台（水車設置費含）	700,000円
発電機（水車との連結材料含）	800,000円
周波数、電圧変換システム	500,000円
照明装置（水中7LED、遊歩道照明）	700,000円
調整費（諸手続）	800,000円
研究、報告会、点灯式、旅費	700,000円
計	6,700,000円
支援金申請額670万円（470万円交付決定）	



上の写真でも分かるように、この事業の目的は、落差のない緩やかな流れの農業用水路で、より効率の良い水車発電の実用化を地球温暖化防止策として実施するものです。

場所も町中を流れる農業用水で、見やすく安全なため子どもへの教育にも活用されているのは、沼田市の「啓発用」の取り組みの参考になると感じました。

実際には、夜間の外灯と周辺のイルミネーションの電力として使用し、日中の電気は少ないながら、売電していると伺いました。

流量では、「速度」ではなく量による「水圧」の効果が思いの外高いことが実感できました。（水が流れ落ちている訳でもなく、ただ普通の川をせき止めて水車を付け、50センチという名目高低差だけで、結構な発電量となる。）



松本市内の運動公園脇にある農業用水路。こうした水路が以前から整備されてきたことが小水力発電には、好都合となっています。



上の写真は、みその町商店街の空き店舗にできた「ほっこりさん」の店内。右上の写真は、昼食に出してもらった「目貼り寿司」。漬けこんだ後に味付けした高菜の葉でご飯を包む郷土料理で、山仕事や畑仕事の合間に食べる弁当として作り始めたのが起源とされています。



・当初は、商店街の方々も懐疑的でしたが、次第に協力的になり、同じ商店街にできたNPO支援センターや子育てサロンを含めて、ポツポツシャッターが開いてきました。（街の活性化）

・たまたま、事業の開始年度に行政の「まちなか担当」が社会福祉課へ移動になり、モノの売買や商店関係者だけにしか補助や助成の出づらいつきに疑問を感じていたところへ『コミュニケーションの向上や福祉』にも着目したこのモデル事業の応募がスムーズに進められたという、運の良さも継続のご褒美かもしれません。

・このWACという組織では平成11年度より、社会福祉・医療事業団の助成を受け、中高年による「地域三世代子育て支援事業」を推進し、「地域三世代子育て支援研修会」の開催や、多くのモデル事業も展開してきました。

その結果、保育園の送迎、一時預かり、産前産後の家事援助、育児困難家庭の家事援助、休耕地を活用した自然農園教育、手作りおもちゃ指導、伝統遊びの継承、おもちゃドクター、親子のたまり場づくりなど多種多彩な活動が展開されてきました。

現在、この組織は全国的な活動を展開していると聞いています。



課題としては、代表の中村さんも話していたが、モデル事業なので新年度から財政支援がなくなり、「社会的使命感」のみで運営できていた事業も、家賃と若干の交通費程度は稼がないと運営の継続性が確保できなくなると伺いました。

補助金・助成金のメリットとデメリットが明確に現れていて、今後注目したいと感じました。

和歌山市の補助がゼロでも無理だと考えられるし、NPO法人ならではのユニークな努力と合わせて「継続性の確保」に向けた「仕組み作り」ができるかどうかモデル事業とNPOの真価が問われていると考えます。

沼田市にも「いこいの家」という同様の居場所がある

沼田市桜町にある高齢者を中心にした居場所である「いこいの家」が、主に財政的事情によって閉館になる可能性があると聞きました。

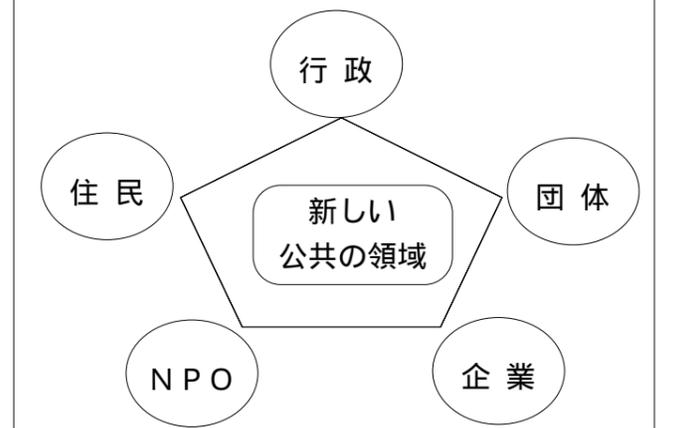
年会費1,000円で、自主運営し、囲碁や将棋、その他自由に交流ができる人気のスポットと聞いていただけに残念です。

半田市の「空家確保」や和歌山市の「空き店舗利用」について改めて、行政と民間（住民）団体の「良い関係」を考えさせられます。

「新しい公共」のイメージ

従来は「公共」といえば「全て行政」でした。「委託」や「下請け」が増えてきたけれど、単に官から民へ移行するだけで良いのか？

収益の望めない福祉部門などを中心に、誰もが「居場所」と「出番」のある社会づくりへ向けて再度、様々な団体や組織が検討をし直してみる時期に来ているかもしれません。



民生福祉常任委員会行政調査報告

和歌山県和歌山市 小について 2012年11月13日

【視点と目的】高齢者の増加に伴う「居場所づくり」という課題と、商店街の空き店舗の活用という課題を合わせて解消していくモデル事業として、常任委員会で議論し調査実施となりました。

和歌山市における具体的事業内容は、市内商店街の空き店舗を改装し、飲食の提供を行う「食」を通じた交流と助け合いのための「人材育成」も試みる事業です。

【和歌山市の概要】

江戸時代には御三家のひとつである紀州徳川家が治める紀州藩の城下町として栄え、「若山」とも表記されました。

県の面積の約4%ほどですが、県人口の約40%が暮らしている約37万人の中核市となっています。

観光地は、何と言っても55万5千石を誇る和歌山城と景勝の雑賀崎でしょう。



【具体的には】事業名は「助け上手・助けられ上手」で、和歌山県から2年間で574万5千円の助成を受け、商店街にある空き店舗を改装して、「食」を通じて高齢者の居場所づくりや子育て支援といった多世代交流を図るものです。

- ・メンバーは15名+常連助っ人3人で、週3日、ランチ限定20食を提供します。
- ・ランチは、500円で、コーヒーはお菓子付きで200円。
- ・2階は、自己資金200万円で開設した「貸しスペース」で、子育て中の母子が気兼ねなく昼食交流が持てるなど好評です。
- ・「手作り作品」の持ち込み品の販売も行い20%の手数料となっています。
- ・パソコンやアートフラワー、藤手芸など様々な「教室」を開催して、生涯学習や多世代交流の場としています。



最初は子育て支援 WACわかやま

(ワンダフル・エイジング・クラブ)

【代表の中村さんのお話】「子どもが手を離れて自分の老後を考えてとき、明るく元気で、毎日楽しく過ごしているようなおばあちゃんになりたかったの(笑)」

「これからの人生も楽しく、自分らしく過ごしたい、まだまだ体は元気だし、何か社会の役に立ちたい。でも、私達って子どもを育ててご飯作って...そんなことしかしてこなかったわよね。じゃあ、それを仕事にしましょうよ!という感じで始めたんです。」

当初は県の委託を受け、(つどいの広場「もうひとつのさとポピンズ」)保育支援グループを作る指導や、委託保育や個人保育、ファミリーサポートなど枠にとらわれない託児のスタイルを迫るなど、子育てが抱える様々な問題点に細かい対応策を提案する活動をしてきました。

「お金があって場所があったら、配食サービスしながら育児サポートがしたい!」と思いつつ日々、悶々としていました。

6年後、舞い込んできたのが、国の新たな政策「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」だったという訳です。

「新しい公共」の自立的な発展の促進のための環境整備費 = 平成22年度予算(87.5億円)



課題もあり希望も

あんな小規模な設備を作るだけでも、専門的知識の習得や膨大な量の農水省・国交省への申請や調整など、とても大変と百瀬さんは話してくれました。

現在の沼田市の体制を考えると、事業実施に漕ぎ着けることに不安を覚えました。

また、逆に一度こうした事業を実施まで漕ぎ着けることができると、国や県からの情報提供やモデル事業の推奨など、態度や姿勢がガラッと急変することも教えていただきました。

実際、現在設置されている波田地区のものは、環境教育としての域を出ていないが、これをきっかけに平成25年には、最大出力464kW、一般家庭920世帯分の電気需要に応えられる「中信平小水力発電所」が開設される予定と聞きました。

地球温暖化防止センター活動への随行調査報告 みなかみ町谷川区ピコ発電事業について H24年11月15日

みぞれのぱらつく中、群馬県地球温暖化防止センターのメンバーや地元みなかみ町の担当職員、高崎の取材班の方々に同行させていただき、小水力の中でも最も小さな「ピコ」発電を見学してきました。

虹の谷ピコ水力tanigawaプロジェクトは群馬県の「新エネルギー導入モデル支援事業」の補助金を受けて、みなかみ町と谷川区が行った市民協働事業と聞きました。

実施主体は、「NPO月夜野」という有志の方々に、その目標を「環境資源の地産地消をめざし、発電施設の設置や維持管理だけでなく発生した電力の使い道や他者への説明など住民自らが主体となり、考え行動します。」として、行政と地域が応援するかたちで事業が進められてきたと伺いました。

今後は、この事業をステップにして旧月夜野町の矢瀬親水公園内でも、小水力発電事業を展開していく予定と聞きました。

谷川ピコ水力発電の概要

虹の谷tanigawaピコ水力発電所は、湧水を主たる水源とする「須摩野上溜池」と「須摩野下溜池」から流下し、澤入のほたるの里に注ぐ、「大清水用水」と呼ばれる農業用水を活用したもの。

今回採用した高落差小水量発電のターゴ水車は、小径ノズルから高速水ジェットを噴射する構造を持つため、取水量が毎秒4リットル程度であり、当面その口径を11.5ミリとして2箇所から噴射させる方式とした。

以下の内容も含めて「澤入ピコ水力hoshiyama完成図書」として、細部にわたって公開しています。(立派です!)

総落差	39.0m
概算流量	静水圧0.36MPA
動水圧	0.32MPA 4L/sec以上
予想発電量	400~600W
最大出力	1000W
年間予想発電量	3,704kWh
電力供給先	町営駐車場外灯および遊歩道イルミネーションライトアップ
完成	平成23年2月
発電機購入費	401,625円
電気制御盤設置購入費	945,000円
発電小屋設置費	598,500円
配管費	231,000円
総事業費	2,306,125円



上写真：ピコ発電小屋
下写真：2つのノズルから水を噴射してターピンを回転させる部分

民生福祉常任委員会行政調査報告

愛知県半田市 小地域福祉活動拠点整備事業について 2012年11月12日

【視点と目的】「高齢者・障害者等の住まい方や活動を支援する拠点」の立ち上げ方、運営方法、課題などを調査する目的で、事前に沼田市社会福祉協議会の中澤事務局長の地域の福祉活動についてのレクチャーを受けて、半田市の取り組みの先進性との比較を試みました。

【半田市の概要】

知多半島の根元に位置して、古くから醸造業が盛んで、ミツカン本社や旧中島飛行機を前身とした輸送機工業(株)などが主な企業です。

人口は、約12万人で人口増加傾向が続いています。

市内には豪華な彫刻・大幕で飾られた重厚な山車が市内各地区に全部で31台あり、毎年春に各地区の祭りで曳きまわされています。

「はんだ山車まつり」

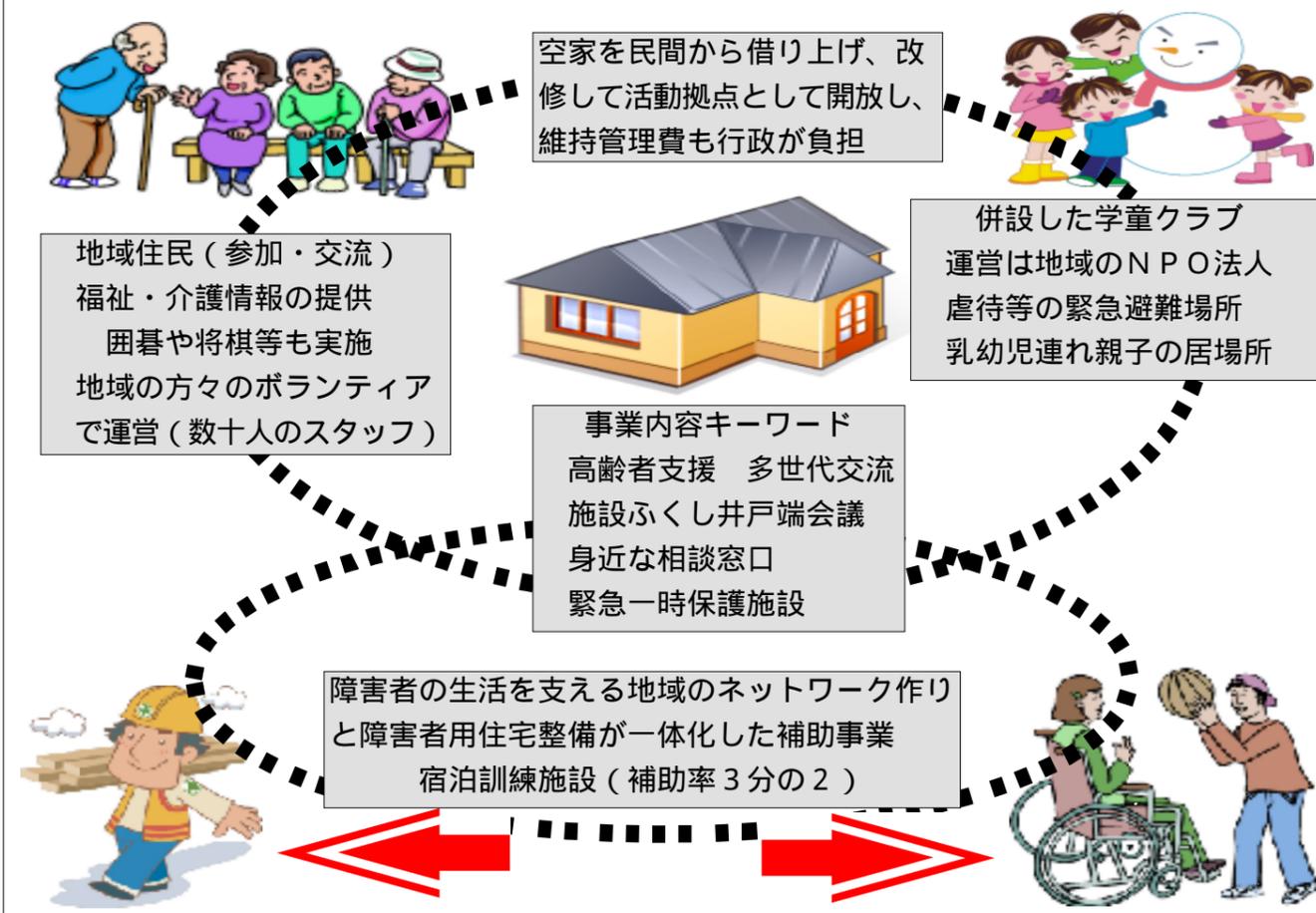


高齢者・障がい者等の住まい方を支援する小地域福祉活動拠点整備事業

『おっかわの家』(乙川中学校区) 事業期間平成22年度～平成24年度

社会福祉協議会とNPO市民活動団体が協働し、高齢者・障害者、児童を対象とした緊急避難・宿泊体験施設を整備。施設を小地域福祉活動拠点とし、専門職員による福祉相談や住宅改修のモデルハウスを展示し、地域住民の交流施設として運営しようとするモデル事業。

専門家・専門職のネットワークも構築してバックアップ(介護機器メーカー、リフォーム会社障がい者自立支援協議会、在宅ケア推進連絡協議会など)



上の写真は、「おっかわの家」で事業の仕組みや内容について語る半田市社協の前山さんと、後方の3人は、半田市の職員の皆さん。

地域福祉課長は女性の杉浦さんで、社協の活動と前山さんとの信頼関係はとてもしっかりしている印象を会話の中から強く受けました。

また、写真左隅には、その時訪れた親子連れの幼児が写っています。

壁には湯茶は無料・コーヒー100円、会員求む、×教室開催などの張り紙があり、日常活動がうかがえました。

おっかわの家の運営概要

【契機】市長のマニフェスト=「共生型社会」それが、地域福祉計画策定の際にも反映。空家は議長の知り合いの人の持ち物でした。

【運営費用】家賃7,5万+光熱水費2,5万=月約10万円のランニングコストは、現在補助金で賄い、次年度からは赤い羽根の事業を当てていく考えです。

【実際の日々の運営】多世代交流サロンとして1日15~20人程度を受け入れている。

世話人と呼ばれるスタッフ約40人で、9時30分~4時30分の時間帯を2交代、2人づつで分担しています。(例:民生委員+ボラ)人員確保が困難な場合は、社協が埋める。

【家具や家財】区長の協力等で寄付を募り、ほとんどそれで、当面足りています。

【企画】あまり毎日企画モノばかりだと、住民が立ち寄りづらくなるので、勝手に企画してカレンダーに記入する方式にしています。

週に数回「わくわく子育てサロン」が開催され、子供には庭の砂遊びが人気です。

【最近の様子】近くの認知症の方の受け入れ場所にもなりつつあり、精神障害者の無農薬栽培の販売と近所の方々のバザーは、盛況となっています。

【特徴】隣に併設の学童保育は、NPOが運営していて、受け入れ人数約10人の内、発達障害の方が3人います。

【今後】11月には老朽化した住民センターを改修して、他の地域でも逐次オープン予定。



担うべき範囲と整合性

期せずして、常任委員会として事前に学習した際にも話題となったのが、桜町にある「いこいの家」が、諸事情により閉鎖となると聞きました。

行政が、どこまで介入するか「空家の提供」「人件費」など「程よいバックアップ」が難しいと感じました。

社会教育(公民館や地区集会所とどこが違って「心地よい空間」となるのかの議論と整理も必要と考えました。

もし、現在の公民館等で、克服可能であれば、新たな物件は必要ないと思われます。

現在より「小地域」なら良いのか?しかし、行政がしっかり責任を持つエリア、また、専門的知識・技能や資格の必要な分野も存在し、ごちゃ混ぜにしてなんでもかんでもボランティアや地縁組織に過度に依存することは、好ましい方向ではないと考えます。

高齢者の活用や働く場についても課題になって久しく、こうしたことと合わせて、継続した深い議論が必要と考えさせられました。

